慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	昔話の叙述の展開とその構造：異類女房譚を例として
Sub Title	
Author	川添, 裕希(Kawazoe, Hiroki)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1986
Jtitle	三田國文 No.6 (1986. 12) ,p.18- 26
JaLC DOI	10.14991/002.19861200-0018
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19861200-0018

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

昔話の叙述の展開とその構造

――異類女房譚を例として――

川添裕希

一

時代や場所を問わず、また口で語られるか文字で書かれているかを問わず、われわれのまわりにはさまざまな〝話〟がある。それらの話はきわめて多様なものであり、それらを何らかの形で分類しなければならない。そこにジャンル分けの問題が生じる。例えば、口で語られる話に限って言えば、一定の曲節をもって語られるものとそうでないものに分けられ、そうでないものは、昔話と伝説と世間話の大きく三つに分類されている。ただ、こうしたジャンル分けをする場合、そのジャンルを他のジャンルと異なるそのジャンルたらしめている本質は何かということが、どうしても問題とならざるをえない。ここで扱う昔話の研究においても、そのことがけっして十分に問われてきたとは言えないように思われる。

昔話のジャンルとしての本質を規定する方法の一つとして、発生論的なあるいは歴史的な見方からするものがある。例えば、柳田国男は、昔話を大きく完形昔話と派生昔話とに分類している。前者は、本格昔話とも呼ばれ、異常なる主人公が、思いがけぬ幸福によって厄難を克服したり財宝を獲得したりして幸福な婚姻に至る、一代記風に組み立てられた話である。それに対して、後者は、小じんまりと僅かな時間に話し了ろうという好みや興味本位のために、完形昔話の話材もしくは話種が極度に派生展開したものと説明され、鳥獣草木譚、継子譚、因縁話、化物話、笑話がこれに含まれる。(1) この分類の背後には、昔話を神話的叙述からの派生展開と想定する歴史意識がある。現実の昔話に先行する歴史的祖型を想定し、そこからのずれの程度によって現実の昔話を分類していく。それは、発生的にあるいは歴史的にその昔話の本質を規定していこうとする方法である。

これに対して、構造の上からその昔話の本質をつかもうとするうう法もある。例えば、プロップは、昔話の登場人物や出てくる物は可変的であり、それよりも登場人物の行為を重視し、それを抽象化したところの機能素という単位を設定した。そして、アファナーシェフの集めた魔法昔話（わが国の本格昔話に当たるもの）を分析して、そこに現れる機能素は三十一個であり、その現れる順序は決まっているという結論に達した。もちろんすべての昔話に三十一個の

機能素が出て来るのではないが、ある機能素が出て来なくてもそこが抜けるだけで、全体の配列順は変わらないと説明されている。[2] これは、昔話に内在している語りの構造とでも呼ぶべきものに着目し、機能素という単位を設定して、昔話の本質を一本の機能素の継起的連鎖によって規定したわけである。それを発展させて、ダンデスは、もっと短い機能素の継起的連鎖によって、アメリカ・インディアンの口承文芸の特質をとらえることに成功している。[3] わが国においては、こうした昔話の構造分析はきわめて少ないが、小松和彦が試みている。[4]

ここで二つの方法を挙げたが、むろん他の観点からする方法が全くないわけではない。また、これは大ざっぱに分けたのであって、さらに細かく分けることもできるだろう。だが、昔話研究の大きな流れを考えると、前者の歴史主義の方法から後者の構造主義の方法へ移っていることは否定できない。それは、言語学が十九世紀に隆盛を極めた歴史主義的方法からソシュールの出現によって構造主義の方法へ移行したことと対応していると言えるだろう。さらに、昔話に限って言うと、登場人物の属性や具体的事物によらず、登場人物の行為を抽象化した機能素の継起的連鎖によってその構造をとらえるプロップの方法は昔話の本質をつかんでいるように思う。それは、まず、昔話において、登場人物はふつうは固有名詞をもたず、その属性や心情はあまり語られないからである。また、昔話は口で語られ耳で聞く文学であり、語り始めと語り終わりに定型句が用いられ、そこにおいては時間の流れというものが重視される。そして、欠乏と欠乏の解消というような機能素の対応を考えることによって、プロップは昔話における時間の流れというものをとらえることに成功しているからである。こうした考えから、私がここで行う分析も、構造の上から昔話の本質をつかむ方法に立脚する。

ところで、プロップは、ロシアの魔法昔話の構造を一本の機能素の継起的連鎖にまとめあげた。そして、それを継承した昔話の構造の研究者も、きわめて多様な昔話を単一の図式によって説明しようとする傾向にある。しかし、私はここで、日本の昔話全体を一つのモデルによって説明しようとするのではない。マクロな観点からではなく、もっとミクロな観点から分析をしようと思う。同一の主題に属するいくつかのタイプの昔話をとりあげ、それが他のジャンルとの接触混交をしながら、どのように叙述を展開していくか、登場人物の属性のような表層のレベルをも考え合わせて、それを構造の上からとらえていきたいのである。

私がここでとりあげる話は、異類の女性が男性のところに嫁入りし、それがある原因で結婚が破綻し悲しい別離に終わるという異類女房譚である。[5] これは、一般の昔話が幸福な結末で終わるのに対して、不幸な結末で終わっている。また、伝説となっているものもあり、他のジャンルとの接触混交も見られる。しかし、こうした話をとりあげることによって、昔話の特質をよりよく見ることができるようにも思われるので、ここでとりあげてみたのである。

二

この系統の昔話の中で、その構造が最も単純なものは、次に挙げる「蛤女房」のような話である。

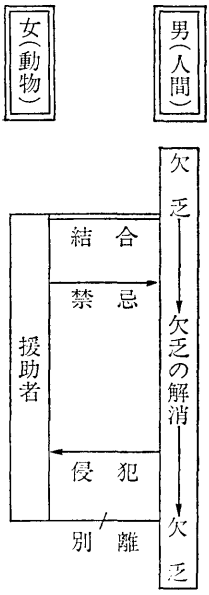
あるところにごく貧乏な、それこそ竹の柱に萱の屋根に住んでいる一人男がおいやって、ところに一人の女子が風呂敷でも

背負ってやって来て、「亭主さん、うちにござるか」「私はあなたと契りを結ぼうごとあって、やって来申した」「あなたのようなきれいな人は、どうあっても私のような者には――」いうのを女は、風呂敷包みはそこに置いて、水の采配する。鍋すすぎする、なかなか、それはそれ古嫁のごとして、采配し出えたちい申す。

そのうち、一夜が二夜になり、二夜が三夜になり、とうとう夫婦暮らしができ申した。ところが世間の噂にだれいうとなく、「あゝこの女子はおつけ鍋にまたがって小便する」という噂―ほんまかな、なか話は、はやらんはずだが―、ある日男は外へ仕事行くふりして、ほそ隠れして見ておったところが、汁鍋を地炉のはたにおいて、妻はほんのこと、チャッチャッ、チャッチャッ、やっている。ほいから男が飛び出て、「お前はなにそうるか」いわれて、びっくいして「私はなに隠し申そうに、あなたにこうして契り結ぶ前に助けてもろうた恩がござって、その恩を返すために毎日おいしいおつけをこしらえあげていましたが、もういるにいられん次第―」女は貝の姿になって出て行って、海に飛び込んだところが、それからこの男の世帯は崩れたちゅう話でござい申す。(6)

男は最初たいへんな貧乏であり、それは言わば欠乏の状態であった。ところが、ある日、見知らぬ女がやって来て働いてくれたので、暮らし向きが良くなった。これは、欠乏が解消された状態である。しかし、ある日、女房が料理しているのをのぞき見したために、女房は本来の姿である貝に戻って男のもとを去っていく。それからこの男の世帯は崩れたという。再び欠乏の状態に戻ったわけである。はっきりと異類女房の口から語られていないが、異類女房が料理しているところをのぞき見しないことが、異類女房と男が結婚生活を続けていく条件であって、それが破られたために異類女房は男のもとを去ったわけである。この話の構造を図で表すと図1のようになる。□は登場人物であり、ここでは男を中心として、その状態の変化を□の中に書き、女の方には、男に対する役割を□の中に書いた。そして、両者の間の関係を表す機能素をその間に書き入れた。

図1



異類女房の正体は、蛤の場合だけでなく、蛙や魚や鶴の場合もあるが、その構造は変わらない。(7) 構造は変わらないけれど、昔話でなく、伝説になっているものもある。その代表的なものが「狐女房」の話である。それは、日本霊異記上巻第二・狐を妻となして子を生ましむる縁を初めとして、いろいろな文芸作品になっている。多くの場合、狐女房と結婚した男は安倍保名で、その狐女房との間の子は安倍清明になっている。説経節や古浄瑠璃に語られた「信田妻」の話である。その伝承には陰陽師が関わっているようである。ともかく、これらの話は、異類の女が男のところに嫁入りし、何らかの原因で男のもとを去っていくということに関しては、「蛤女房」の

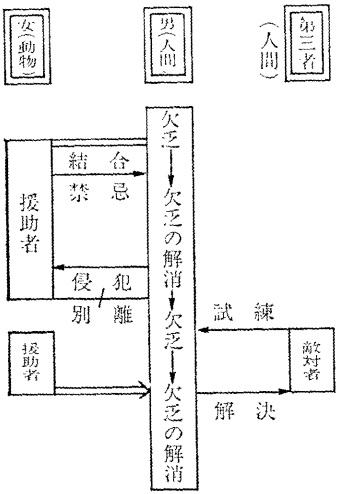
話と同一である。しかし、結末において、「信田妻」の話の場合には、実在の人物である安倍清明の出世譚と結びついている。また、日本霊異記の話の場合には、三野（美濃）の国の狐の直らの始祖伝承になっている。

ここで、昔話と伝説の相違について少し考えてみたい。伝説は、昔話に対して、特定の時代・人物・地域と結合し、特定の事物を証拠として伝え、その叙述には一定の形式をもたず、さまざまな方法によって真実性を主張するという違いがある、と説明されている。(8) それを構造の面から考えてみると、昔話の場合には、話の枠組があって、禁忌とその侵犯、欠乏と欠乏の解消というような機能素と機能素の対応によって、その中で叙述が形づくられていく。それに対して、伝説は、機能素と機能素が結びついて叙述を形づくっていくということはあまりない。それよりも、過去の特別な事件によって、現在の事実を説明することに重きを置く。例えば、「弘法水」の伝説がある。泉があって、その泉は、弘法大師のような諸国行脚の高僧が杖を突き立てたときに湧き出てできたものであるという内容である。泉という現存の事物の起源を、高僧が杖を突き立てたという過去の特別な事件によって説明しているわけである。こうした現在の事実の起源を説明する、話の中の要素を、説明素と名づけよう。「狐女房」の話で言うと、現在の事実は特殊な家筋の存在であり、それに対応する説明素は、過去に人間の男と異類の女が契りを結んだことである。結局、昔話と伝説の相違は、話を形づくり伝承していく主体が、話の内部に関心をもつか、それとも外部の現存の事物に関心をもつかという相違が、構造の上に発現したものである。したがって、両者を截然と区切ることはできない。しかし、両者は対立的な傾向にあるとは言えよう。ある話が伝説的特質を強くもつに従って、昔話としての特質は弱くなっていく。例えば、「狐女房」の話で言うと、なぜ異類女房と男が別れなければならないかということが、明確でなくなってくる。狐女房が正体を発見された理由は、「信田妻」の話の場合には、子供にしっぽを見られたからであり、日本霊異記の話では、その家の犬に吠えられたからであるが、「蛤女房」の話に比べてそれほど明確になっていない。

異類女房譚でもっと構造が複雑になったものに、「蛇女房」の話がある。ある若者のところに美しい女がやって来て、夫婦になる。女房は妊娠し、自分がお産するところをけっしてのぞいてくれるなと夫に言って、部屋に入ってお産をする。ところが、夫がのぞいてみると、大蛇が赤児を産んでいる。女房は見られたことを悟り、自分の正体を告げ、子供を育てるための玉である自分の片目を置いて去る。しかし、その玉が有名になり、殿様に取り上げられてしまう。困った夫が池へ行くと、かつての妻である片目の蛇が現れて、もう一方の目を与える。それも殿様に取り上げられてしまうと、盲になった蛇は、夫と子供を安全な地に逃した後、洪水を起こして殿様に復讐するという筋の話である。蛇女房が起こした洪水を寛政四年の島原の大地震と結びつける話もある。また、盲目になった蛇が、これでは時がわからないので、寺に鐘を寄進して、朝夕に撞いてくれと頼むという話もある。その鐘が三井寺の鐘だとしている話もある。おそらく、それは、座頭が話の伝承に関与しているためであろう。ともかく、この話の場合には、男は、異類女房と別れた後も、異類女房から援助を受けている。それは、子供を育てるために女房が置いていった目玉を殿様などの第三者がとりあげるという試

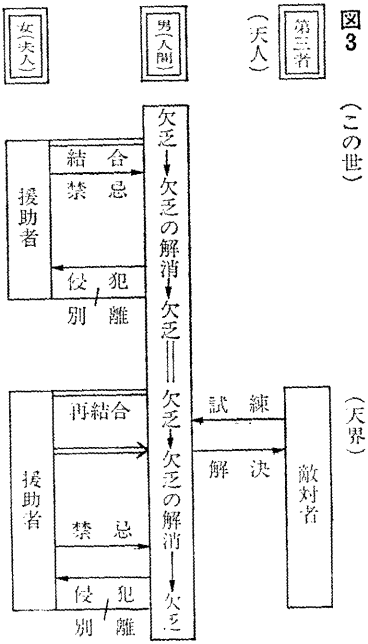
練に合ったときにである。そして、男とその子供は、異類女房の力によって、殿様の迫害から逃れることができたわけである。男を中心にして、この話の構造を図で表すと、図2のようになる。

図2



さらに構造が複雑になったものとして、「天人女房」の話がある。ある男が、天女が沼で水浴びをしているのを垣間見て、その羽衣を隠し、妻にする。男と天女の間に、子供が二人もしくは三人生まれる。それが天女に羽衣の隠し場所を教え、天女は稲束の下などから羽衣を見つけ出し、飛び去っていく。[9] ここで話が終わり、男と天人女房との間の子が、地方豪族の始祖になるという話もある。南西諸島では、天人女房の子が、王朝の始祖になったり、ノロ・トキ・ユタなどの宗教者の始祖になっている。しかし、さらに話が展開していくものも多数ある。男は、夕顔などの種をまいて蔓を伸ばし、天上へ行って天女と再会する。天女の親が畑仕事の難題を出すが、それも天女の援助で解決する。しかし、天女から禁じられていた瓜を割ってしまい、大洪水となり、天女と男は訣別する。二人は七月七日にだけ会うこととなり、それが七夕の由来と結びついている話もある。この話の場合には、男は、この世にとどまらず、天上の世界へと移動している。そして、そこで天女の親という第三者からの試練があり、それを解決した後、再び禁止されたことを侵犯するということが繰り返されている。その結果、男と異類女房はまた訣別してしまうわけである。この一番複雑な話の構造を、男を中心として図で表すと、図3のようになる。

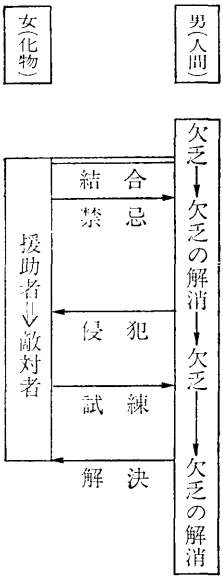
図3



それから、特殊な構造をもつものとして、「食わず女房」の話がある。[10] ある男が、飯食わぬ女房を求めていると、そのとおりの女が来て、夫婦になる。飯を食わぬにしては米が減るので、ある日、男は出掛けるふりをして、天井に登って見ていると、女房は頭上の口に握り飯をほうり込んでいる。恐しくなった男は、仕事から帰って

きたふりをして、女房に暇を出す。正体を見られたことを知った女房は、「形見に大桶を作ってくれ」と言うので、男は大桶を作ってやる。すると、女房は男をその大桶の中に入れ、山にかついで行ってしまう。途中、男は木の枝につかまって外へ出、菖蒲と蓬の繁みに隠れる。女は追って来るが、菖蒲・蓬のために近づくことができず、男は助かる。そして、それが五月節句に魔除けとして菖蒲と蓬を軒にさす由来と結びついている。また、菖蒲・蓬の代わりに譲葉を用いて難を逃がれ、それを正月の注連飾りの由来と結びつけているものもある。それから、別に話が展開していくものもある。木につかまって桶から逃れた男は、化物女が「獲物に逃げられたから、今晩、蜘蛛になって取りに行く」と仲間たちに話しているのを、盗み聞きする。その晩、男の家の自在鉤から、蜘蛛が降りて来たのを捕まえて、囲炉裏の火で殺してしまう。そして、「夜蜘蛛は親に似ていても殺せ」という諺と結びつけて語られる。これらの話において、異類女房の役割は、終始一貫せず、変貌している。男の飯食わぬ女房が欲しいという要求を満たすべく、異類の女が来て、夫婦になった。援助者としてやって来たわけである。ところが、男のいない間に、異類女房は、大量の飯を食べてしまい、それが男に見つかると、今度は男を殺そうとする。異類の女房は、男にとって完全に敵対者に変わってしまう。男は、異類女房に殺されそうになるという試練に会うが、誰からの援助も受けず、自分の知恵でそれを解決する。この話の構造を図で表すと、図4のようになる。

図4



三

これまでの分析から、異類女房の正体が何であるかによって、話の構造も変化しているようである。そこで、異類女房が何であるかということとその場合の話の構造的特質の関係を表で示すと、表1のようになる。

	異類女房の正体	出てくる機能素連鎖	説明素
(1)	蛤・蛙・鶴・猫・魚	結合→禁忌→侵犯→別離（基本形）	無し
(2)	狐・天人	結合→禁忌→侵犯→別離（基本形）	有り
(3)	蛇	（基本形）→試練→解決。第三者の登場	有り
(4)	天人	（基本形）→再結合→試練→解決→禁忌→侵犯→別離。第三者の登場	有り
(5)	妖怪（鬼婆・山姥・蜘蛛・蛇）	（基本形）→試練→解決。女房の役割変化（援助者→敵対者）	有り

表 1

表で最も単純な構造の(1)の場合、異類女房の正体は、蛤・蛙・魚などである。蛤の場合、古事記や出雲国風土記の蛤貝比売のような神格化されている例もあるが、そたはごく少数であり、一般的に神格化されることはないと言ってよいだろう。(2)の場合、異類女房が狐の例が多い。狐は、稲荷のように、神の使わしめや神それ自身とも考えられている。(1)に比べるとより神格化された存在である。もっと複雑な構造をした(3)の場合、異類女房は蛇である。蛇は、常陸国風土記の夜刀の神のように、古代においては神として崇敬された存在である。それは、(1)や(2)よりもより神格化された存在である。しかしながら、これまで挙げてきた動物たちは、全く人間に馴致された存在でもなく、また神格化されることはあっても、全く人里離れた所に住んでいる空想上の存在でもない。言わば人間社会の周辺に位置している存在である。そして、水辺や大地に関連をもった存在でもある。さらに複雑な構造をした(4)の場合、異類女房は天人である。それは、これまでの動物の場合と違い、異界に住んでいる全くの超自然的存在である。しかし、天上から降りて来て沼で水浴しているところを男に発見されるなど、水辺とのつながりをもち、全くの超越的存在になりきっていない。そして、異類女房の役割が途中で変化する(5)の場合には、山姥や鬼婆などの妖怪である。あるいは、蜘蛛に化けて出現するところから、元々は蜘蛛で、それが妖怪に変わったのかもしれない。それが、話の構造の屈折化に反映しているのだろう。とにかく、天人を正の超自然的存在とすれば、こちらは負の超自然的存在である。

結局、最も単純な構造の図1の場合には、異類女房の正体は、人間の周辺に位置する自然に棲息する動物である。それが神格化されている存在や超自然的存在に変わるに従って、話の構造は複雑になり、説明素を伴って伝説化していく。さらに、それが人間に恩恵をもたらすものでなく、人間の生活に災厄をもたらす超自然的存在である妖怪と考えられるようになると、話の構造に屈折化を生じる。ここには、日本人の自然に対する考え方、その分類観とでも言うべきものがうかがわれる。(11)

これに対して、男の方は、ただ貧乏で結婚するに適した年齢であるというだけで、それ以外に何らの属性も与えられていない。そして、最も単純な構造をした(1)の場合には、男は、全く移動せず人間の世界にとどまっている。しかし、話の構造が複雑になるに従って、男に移動が見られるようになる。最も複雑な構造をした(4)の場合には、人間の世界を離れて異界である天上へと移動している。

四

結局のところ、この系統の話に共通して存在する構造は図1のように表せるものであり、それが基本構造とでも呼ぶべきものになっている。そして、その基本構造を通して、その主題を考えると、それは人間と自然とのバランスということになる。(12)人間の側が、日常生活において、規範を無視して過度に自然に接近すると、自然との間のバランスを失ってしまう。この話の場合だと、その規範というのは、自然とかかわりをもつ食物の調理や衣類を織る時や出産の時などに、厳重な男女の別離が課せられるということである。男は、それを守らなかったがために、すべてを喪失して元の状態に戻ってしまったのである。これは、異類女房譚ではないが、昔話の竜宮童子や椀貸し淵の伝説とその論理構造は同じである。椀貸し淵という

のは、椀や膳が入用な時に頼めば貸してくれる淵である。あるいは、川・池・沼・塚・洞穴の場合もある。貸し主は、淵の主である竜神・河童・大蛇・乙姫で、その地は竜宮につながっているという伝承もある。また、貸し主が狐の場合もある。そして、その借りた膳椀をこわしたり、数をごまかしたりして返したため、それ以後は貸してくれなくなったという。そこには、膳椀を作って歩いた木地屋との関連が考えられている。[13] しかし、その基底にあるものは、人間と自然とのバランスであり、やはり人間側の悪意によって、自然とのバランスを失ってしまう。それは、異類女房譚の基本形の主題と同じである。

ところで、バランスを喪失した自然との距離が大きければ大きいほど、それを回復する手段が考え出されてくる。そこに出現するのが、呪術者的存在である。人間と超自然（自然の人間との距離が過度に大きくなった状態）の存在との間の子である呪術者が呪術を用いて、人間から過度に隔たった自然との距離を縮小することによって、人間と自然とのバランスを回復しようというわけである。そこに、異類女房譚が始祖伝説となる契機がある。。昔話は、人間の周辺にあるものを用いて、その構造を通じて、自然と人間とのバランスのあり方について叙述する。それに対して、始祖伝説は、自然と人間とのバランスを叙述するよりも、超自然の存在を用いて、自然と人間とのバランスを回復する社会的制度に関心をもつ。両者の歴史的前後関係は、そう簡単に決められない。その構造は同一であり、それを伝承してきた社会の人々の関心に応じて、口承文芸の世界の中で位相化され、併存してきたと考えた方がいいかもしれない。

しかしながら、この系統の昔話の方は、その構造があまりに単純であり、また時間的に不幸な結末へと向かって進行する話であるため、それだけでは自立した存在となりにくい。そこで、伝説化したり、構造が複雑になったりする。しかも、それは日本人の自然に対する考え方に対応して変化している。古代的な自然と人間とのバランスの感覚が失われると、異類女房は超自然的なものと想像され、異類女房と別れた後の男の行動へと話が伸びていく。しかし、それは基本構造の枠に規制されて話が展開しているのであり、何かしら悲劇的な結末で終わっている。さらに、異類女房が人間に災厄をもたらす超自然的存在である妖怪と考えられるようになると、男がその異類女房からいかに逃れるかに関心が移ってくる。そして、「牛方山姥」の話のようないわゆる逃竄譚へと変質してしまうのである。このように話はさまざまに展開するが、この系統の話の主題は人間と自然との関係であり、それは結末が伝説化することによってその主題に戻っていく。

このように、異類女房譚と言われているものの中には、日本人の自然に対する考え方の共時的な変異と通時的な変化に応じて、さまざまな話が存在している。その基本構造は同じくしながら、人々のもっている世界観に応じて、それが変形して、さまざまなタイプの話を生み出していく。これからは、こうした口承文芸のもっているダイナミズムとでも言うべきものを、もっといろいろな系統の話を見ることによって、見出していきたいと思う。

1 注

柳田国男『口承文芸史考』（昭和二二、『定本柳田国男集』第六巻所収）この昔話に対する考え方に基づいて、実際に昔話を分類したものが、『日

本昔話名彙』（昭和二二）である。

2 ウラジーミル・プロップ『民話の形態学』（一九二八）（大木伸一訳、昭和四七）

3 アラン・ダンデス『民話の構造』（一九六四）（池上嘉彦他訳、昭和五五）

4 小松和彦『神々の精神史』「神霊の変装と人間の変装」（昭和五三）

5 筆者とその構造に対するとらえ方は異なるが、わが国以外の東アジアの資料を援用しながら、この系統に属する昔話の変異を扱ったものとして、関敬吾『昔話の歴史』（昭和四一）がある。

6 柳田国男編／岩倉市郎採録『日本昔話記録11・鹿児島県甑島昔話集』（昭和一九）

なお、一々注は付さないが、個々の話型については、関敬吾『日本昔話大成』（昭和五四）によっている。

7 鶴女房の場合、鶴女房は去っていくけれども、鶴女房が織ってくれた布で、男が裕福になっている話もあり、その構造はくずれている。また、鶴女房が去る時に、居場所を暗示する謎を残し、男がそれを解いて会いに行くという話もある。

8 柳田国男、前掲書

9 なぜ天人女房と男が別れなければならないのかその理由が、「狐女房」の話の場合と同様、ここでも明確でなくなっている。「蛤女房」などの話の場合、異類女房と男が別れなければならなくなった原因である男の覗き見が、ここでは、異類女房と男を結びつける原因となっている。

10 『日本昔話大成』では逃竄譚に分類しているが、異類女房譚の変形である。

11 こうした分析を積み重ねていくことによって、小沢俊夫『世界の民話』（昭和五四）のようなわが国の昔話の比較による研究とはまた別な日本人の自然に対する考え方が明らかになるだろうと思う。

12 昔話の主題ということについては、小松和彦「猿聟への殺意」（『日本昔話研究集成』4所収、昭和五九）参照。

また、異類婚姻譚の主題が人間と自然の関係であることは、雨宮裕子「異類婚の論理構造」（『日本昔話研究集成』1所収、昭和六〇）で指摘されている。

13 柳田国男『一目小僧その他』「隠れ里」（昭和九、『定本柳田国男集』第五巻所収）